

環境問題に対する大学生の意識について

A study on awareness of university students about environmental problems

杉 憲子[1]

Noriko Sugi[1]

[1] 共立女子大

[1] Kyoritsu Women's Univ.

若者たちの地球科学を学ぶ機会が減少している。大学においても、教養科目または専門科目としての地球科学を設置していない場合もみられるが、環境問題については近年は複数の分野にわたって様々な科目が開講されている。

地球環境の破壊や汚染の問題は、このまま放置すれば近い将来に人間だけではなく他の生物たちも地球上に住むことができなくなる恐れがある。しかも環境問題を引き起こしたのは人類の活動であり、私たち自身が被害者であると同時に加害者でもあるという特徴がある。これは視点を変えれば、環境問題は私たちの工夫と努力によって解決可能であり、一人一人の問題認識と改善に向けての積極的な行動が重要であることを意味している。従ってこれからの社会を担っていく大学生に対しても、授業やゼミなどを通じて問題の基礎的な分野を学習し実生活に応用する技術を身に付けて、地球環境に配慮した生活を営むように努めることが厳しく要求される。

そこで今回は環境問題に注目して、大学生がこれをどの様に認識し行動しているかについて、本学の授業時のレポートと卒業研究の論文を参照して現状を報告し問題点を提起する。

本学では家政学部と文系 2 学部の学生を対象とする「地球科学」の授業において、地球と共存する方法を模索することを重要なテーマの一つと位置付けている。その中で環境問題については、地球の誕生から進化の過程や生命の誕生と進化を解説した後に、地球のこの環境は多くの幸運が重なって創り出されたものであることに触れ、環境に配慮して生活することが如何に大切であるかを考える機会を設けている。

最近では地球環境の問題が世界的なレベルで大きくクローズアップされているため、環境破壊の原因とその現状についての学生たちの認識度は高い。深刻な環境問題として温暖化・オゾン層破壊・酸性雨が多く、学生から指摘され、この他に環境ホルモン（やダイオキシン）・森林破壊（や森林減少）・砂漠化・水質汚染などもあげられる。しかし積極的に対策を考える機会は少なく、たとえ改善策がわかっても自らの行動には結びつかないようである。

学会当日は、学生がそれぞれの問題をどのように認識しているか、どのような解決法があると考えているか、学生たち自身はどのように解決策を実践しているかなどについて詳しく報告する。認識と実践との差を埋めるための方策を検討したい。

更に本学の家政学部では、衣・食・住の分野でそれぞれ授業内容に環境問題を含んでおり、専門の立場から踏み込んだ講義やゼミが行われている。また 4 年次の学生の卒業研究では、生活者の立場に立って地球環境に関して様々な研究や取り組みを行っている。卒業研究の学生募集の際には、環境問題は人気が高いテーマの一つである。

私自身は数年にわたって、「地球環境に配慮した生活」のテーマで衣・食のスペシャリストを目指す学生たちの卒業研究に携わっている。研究方法は、アンケート調査による現状と意識の調査、テーマに即した現地調査、資料調査による世界各国の現状比較などである。アンケート調査は主に女子大学生を対象として行い、日常生活の中でどの程度あるいはどのように環境を意識しているかについて質問している。具体的には、衣の立場からは Reduce・Reuse・Recycle のいわゆる 3R に関連するテーマが度々選ばれ、食の立場からは環境ホルモン（ダイオキシンを含む）や遺伝子組み換え食品などが扱われてきた。

これまでに得た結果では地球環境に対する認識度は非常に高く、これは教養科目の「地球科学」を履修する学生にみられる傾向と同じである。多くの場合に学年・学部による差や住んでいる地域による差は有意とはいえないが、一人暮らしか実家暮らしのような住まい方の違いによって実生活での環境への配慮の度合が変わってくる。

学会当日はレポートやアンケート調査の結果を報告し、学生の地球環境に対する意識について議論する。また、環境先進国といわれる国々と比べて日本では実現が難しいとされる環境への様々な取り組みについて考察し、なぜ困難なのかその原因を探る。

地球科学への学習意欲をどうしたら高めることができるのか。「地学教育」のセッションが創設されたときからの重要なテーマである。昨年末の「地球科学」の授業で、「環境問題に関する本を一冊選んで、内容をまとめよ」というレポート課題を出したところ、一人の学生がレイチェル・カーソンの「沈黙の春」を選んでいった。高校時代に英語の教科書で読んだが理解できず、改めて読み直して深く感動したという。小・中・高校でこのような将来につながる授業が行われていることは素晴らしいと、こちらも深く感動した。